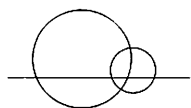


〈展示会・講演会の企画運営に当たり〉



今年は京都、米沢そして名古屋で展示会・講演会を開催

愛知大学東亜同文書院大学記念センター／豊橋研究支援課 山口恵里子

愛知大学東亜同文書院大学記念センター / オープン・リサーチ・センターでは、文部科学省の補助金を得て2006年度より5ヵ年間に、全国で展示会・講演会を開催するプロジェクトを実施してきました。

収蔵資料の公開事業は、「東亜同文書院大学から愛知大学へ」をメインテーマとし、横浜・東京・弘前・福岡・シカゴ・神戸に引き続き、今年は7月に京都で「大陸にあった日本の高等教育機関と東亜同文書院」のテーマで開催したあと、その1ヵ月後には東亜同文書院最後の学長であり本学の創設者・本間喜一学長の故郷、山形県米沢市で「置賜（おきたま）が生んだ本間喜一をめぐって—東亜同文書院大学から愛知大学そして最高裁判所—」のテーマで開催し、この事業のまとめは11月に地元名古屋で「東亜同文書院大学から愛知大学へ—近衛家、荒尾精、孫文、中国アジア大旅行、日中交流—」のテーマで開催しました。

京都資料展示会・講演会

展示会 7月17日（土）～18日（日）

10:00～18:00

講演会 7月17日（土） 13:30～17:00

7月17日～18日にわたり、コープイン・京都で、東亜同文書院設立に係わった荒尾精、根津一、近衛篤麿の3人や孫文関係資料の展示会と講演会を開催しました。

会場探しは、昨年11月に開催した神戸展示会・

講演会の帰路、京都に立ち寄り探しを始めました。当初、京都駅に近い京都キャンパスプラザを第一候補に訪れたものの、貸し出しは地元の大学優先で、しかも予約抽選時には京都の大学関係者が同行することが条件とのことで、やむを得ず断念しました。他の施設も当たりましたが、条件に合う施設は改修中や遠方のため決められませんでした。その1ヵ月後には、開催予定日が祇園の日でしたが、偶然にもコープイン・京都が予約できました。「祇園の最中では人は集まらない」の声に、喜びもつかの間不安が倍増しましたが、他に適当な所はありませんでした。その後は「雨が降れば人は集まる」「祇園は京都人にとっては恒例の行事だから影響は少ない」と都合よく解釈しました。

講師は、「大陸にあった日本の高等教育機関と東亜同文書院」のテーマににあわせて5名の方を選出し講演内容を決めました。旧満州の新京（現在の長春）にあった建国大学出身の佐藤達也氏は「建国大学と私」、ハルピン学院最後の卒業生の谷藤助氏は「ハルピン学院と私」、東亜同文書院大学卒業生の小崎昌業氏は「東亜同文書院（のちの大学）と私」としました。そして、当記念センター長の藤田佳久氏は、「東亜同文書院のあゆみと中国大調査旅行」、当記念センターのポストドクター武井義和氏は「東亜同文書院に入学した京都府出身者～明治・大正期の府費生を中心に～」としました。

暫くして、小崎当記念センター委員より京都で

開催するなら、是非、荒尾精の顕彰碑がある熊野若王子神社で追悼式を挙行したいとの熱い提案があり、碑を寄贈した（財）霞山会に式開催に当たり補助金のお願いをしました。当初は大学関係者のみの行事と考えていましたが、本学の広報も兼ねてチラシ・ポスターに掲載することに決めました。「東方斎・荒尾精先生追悼式ご案内」も作成して、6月はじめには記念センター賛助会員はもとより書院関係者、京都を中心に滋賀や大阪まで広げて遅い広報活動を始めました。京都府教育委員会、京都市教育委員会、読売新聞大阪本社、愛知大学同窓会に後援をお願いし、（財）霞山会には共催のお願いをしました。

2月18日、恒例の愛知大学同窓会主催の梅花忌（根津一墓参）に誘われたのを好機に、同窓会役員や京都支部のみなさんと会場の下見に出かけました。最初に根津一初代書院院長の菩提寺がある京都・月橋院に参拝しました。次に（財）霞山会が寄贈した日清貿易研究所の創始者である荒尾精の石碑と住居跡がある京都・熊野若王子神社に行き、東方斎・荒尾精追悼式を7月18日に実施するにあたり、祭事の準備や祝詞のお願いをしました。若王子神社の横には、「同志社大学創設者新島襄墓所参道」の石碑が目立つが、荒尾精の石碑やその解説碑には本学の事が記されず、愛知大学と書院とのかかわりについてPRしてほしいとの同窓生の熱い声もありました。

講演会に合わせて、同窓会京滋地区の総会もコープイン・京都で開催するため、関係者の方々と現地に行き、催事担当者と打合わせを行いながら、会場作りのために講演会ホールや会議室等をカメラに収めました。開催場所は京都四条駅の近くとはいえ、大通りから奥に入った町屋の中に位置し通り客は望めず、同窓会を通じて参加の呼びかけのお願いをしました。

展示品は、本学が所蔵する東亜同文書院関係資料と孫文を支えた山田良政・純三郎兄弟の資料8点を選び出し、京都に関係の深い荒尾精関係資料

3点、根津一関係は、根津えい夫人などの写真を入れて3点を選び、近衛篤磨関係2点も加えました。

会場設営は、前日の午後から関係者で行いました。講演会場は定員150名を収容できるように三人掛けの長机と椅子をセットし、併せてプロジェクターの準備もしました。展示会場は、隣接する2つの会議室の間仕切りを外して1部屋にし、入り口横の壁を除いてコの字形にパーテーションを入れて、東亜同文書院大学から愛知大学へのテーマに従って史資料を展示しました。入り口の壁には、東亜同文書院大学第42期生の三田良信氏が、わざわざ金沢市から持参し、寄贈していただいた「東方斎・荒尾精」の見栄えのする書幅を展示することができました（書の詳細については、当記念センター発行の「同文書院記念報18号」を参照してください）。

会場の中心には荒尾精の「人の本心は善にして」（書）と、大旅行の『調査報告書』及び『華語萃編』を並べると会場が引き締まりました。隣の小会議室には、当記念センター作成のDVD「東亜同文書院から愛知大学の歩み—21世紀にはばたく真の国際人の育成—」を上映できるようにレイアウトし、入り口付近の壁際には「創成期の群像」を中心としたイーゼルパネルを使用して展示することにしました。

受付には京都資料展示図録を作成して展示物を紹介すると共に、日に3回の展示説明会も開催しました。また、当記念センター発行の印刷物や成果物を置いて、より理解を深めるようにしました。

17日の講演会当日は、梅雨明けの猛暑となり祇園の最中にも係わらず、京都新聞や読売新聞に掲載されたこともプラスし、150名余りの方が講演会・展示会に来ていただきました。2日目は、展示会に加えて熊野若王子神社で荒尾精の追悼式を霞山会の協力を得て開催しました。霞山会の方はもとより、学長・副学長をはじめ書院卒業生・同窓会役員の方や一般の方も加わり30名ほどが

参拝しました。石碑の解釈は東亜同文書院大学第42期生の三田氏にお願いし、『同文書院記念報19号』の「荒尾精と若王子神社」の中で紹介していただくことをお願いしました。

展示会2日目に別会場で追悼式も開催したこともあり、あわただしい事業でした。今回も記念センター関係資料に加え大学案内も持参しましたが、本学をPRするよい機会となりました。



ハルビン学院 校舎 建國大学 正門 東亜同文書院 正門

愛知大学東亜同文書院大学の 京都資料展示会・講演会

大陸にあった日本の高等教育機関と東亜同文書院

戦前、大陸に日本の高等教育機関がそれぞれの目的で開設された。それらの学校はなくなったが、その後の時代の中で卒業生達はその経験を多面的に継承してきた。それらの経験をふまえ、数少なくなった卒業生達が自分達の貴重な在学経験を中心に伝えて、かつ卒業生の人生経験をふまえつつ、今日の日中間関係や国際関係のあり方への新たなメッセージを発信する。

展示会 2010年7月17日(土)~18日(日)

場所 コープ・イン・京都 2階

時間 10:00~18:00

講演会 2010年7月17日(土)

会場 コープ・イン・京都 2階

時間 13:30~17:00 定員150名

- 1 佐藤達也氏 建國大学
「建國大学と私」
- 2 谷 藤助氏 ハルビン学院
「ハルビン学院と私」
- 3 小崎昌業氏 東亜同文書院大学
「東亜同文書院(のち大学)と私」
- 4 藤田佳久氏 愛知大学文学部教授・愛知大学東亜同文書院大学記念センター長
「東亜同文書院のあゆみと中国大調査旅行」
- 5 武井義和氏 愛知大学東亜同文書院大学記念センター ポストドクター
「東亜同文書院に入学した京都府出身者〜明治・大正期の府費生を中心に〜」

交通のご案内 JR京都駅から地下鉄 烏丸線「四条駅」
⑬番出口より徒歩5分
JR京都駅よりタクシーで約10分



東方斎・荒尾精先生追悼式も実施

追悼式 2010年7月18日(日)

場所 若王子神社 荒尾精追悼碑前
(哲学の道 入口横) 京都市左京区若王子町2

当記念センターでは、今回京都でのこの展示会と講演会開催にあたり、東亜同文書院の創設にかかわった東方斎・荒尾精先生を近衛篤磨公がたたえた墓碑に参拝し、あわせて書院初代院長根津一先生および近衛公の三先覚の追悼式を行います。

■主催/愛知大学東亜同文書院大学記念センター/オープン・リサーチ・センター
 ■共催/財)霞山会
 ■後援/京都府教育委員会/京都市教育委員会/読売新聞大阪本社/愛知大学同窓会

お問い合わせ 愛知大学東亜同文書院大学記念センター
 〒441-8522 愛知県豊橋市町畑町1-1 TEL0532-47-4139 FAX0532-47-4196 E-mail tshien@mlaichi-u.ac.jp

入場無料
どなたでも自由に参観ください。

丹心照萬古

東亜同文書院大学の京都資料展示会

孫文を支えた書院の山田良政・純三郎兄弟

【山田良政写真】
山田良政は、1900年に孫文が中山広東省都督で設立した「臨時革命軍」に参加して戦死した。中国革命に参加して命を落とした最初の外国人といわれている。

【山田良政先生遺稿】
1913年2月27日、日本を公式訪問していた孫文が迎えたもの。東京谷中の金生庵に設立された孫文の寓居となっている。

孫文 天下為公

【天下為公】
孫文意、「天下を公と為す」。天下を私せず公有物とするという意味。「礼記」「礼運篇」の一節。孫文はこの言葉を好んで書した。山田兄弟のもとにも贈られているが、展示品は東亜同文書院が所有していた故山田良政一氏に贈られたもの。

【孫文と山田純三郎】
右側が孫文、左側が山田純三郎。純三郎は山田良政の弟。良政の死後、その遺志を受け継ぎ、孫文の秘書として革命活動を支え続けた。1925年に孫文の遺族に立ち会った唯一の日本人である。

【孫文と宋慶齡】
1921年4月7日孫文が広東政府大総統に就任したことを記念して、山田純三郎に贈られた写真。孫文夫人の宋慶齡（1893～1981年）は、孔祥熙（国民政府幹事）夫人の姉・宋美齡とともに、「宋家三姉妹」として知られている。

【孫文辞世】
1925年、北京で客死した孫文は、北京西山の碧雲寺に埋葬されたが、1929年6月2日、南京に新しく造られた中山陵に改葬された。

【土城文明碑】
1944年、土城文明（1890～1950年）が、南京の中山陵を訪れた際、山田良政の碑をみて涙んだ写真。『土城文明』所収『戦南京雑感』中の一句。展示品は、山田純三郎（山田純三郎四男）に贈られたもの。

図録（4頁）

【孫文辞世の孫文への見舞状】
1925年2月28日、孫文が北京で客死した時、孫文が北京で客死した時（1898～1906年）以来、孫文を支えていた。また、1906年に山田純三郎が孫文に就任したのは、当時孫文が北京で客死したという状況があった。

【孫文辞世】
1925年3月13日、国民政府委員・孫科（孫文長男）から山田家に宛てられた、孫文の死を伝える電報。

【孫文の革命資金に関する書簡】
孫文が山田純三郎に宛てた孫文書。1915年2月2日の日付がある。革命資金として渡された金の領収書と思われる。

【孫文と宋慶齡】
1921年4月7日孫文が広東政府大総統に就任したことを記念して、山田純三郎に贈られた写真。孫文夫人の宋慶齡（1893～1981年）は、孔祥熙（国民政府幹事）夫人の姉・宋美齡とともに、「宋家三姉妹」として知られている。

【孫文と宋慶齡】
1921年4月7日孫文が広東政府大総統に就任したことを記念して、山田純三郎に贈られた写真。孫文夫人の宋慶齡（1893～1981年）は、孔祥熙（国民政府幹事）夫人の姉・宋美齡とともに、「宋家三姉妹」として知られている。

【孫文と宋慶齡】
1921年4月7日孫文が広東政府大総統に就任したことを記念して、山田純三郎に贈られた写真。孫文夫人の宋慶齡（1893～1981年）は、孔祥熙（国民政府幹事）夫人の姉・宋美齡とともに、「宋家三姉妹」として知られている。

【孫文と宋慶齡】
1921年4月7日孫文が広東政府大総統に就任したことを記念して、山田純三郎に贈られた写真。孫文夫人の宋慶齡（1893～1981年）は、孔祥熙（国民政府幹事）夫人の姉・宋美齡とともに、「宋家三姉妹」として知られている。

図録（5頁）

愛知大学
東亜同文書院大学の京都資料展示会

戦前、外地にはさまざまな経緯から日本の高等教育機関が開設されました。愛知大学の前身東亜同文書院（のち大学）もその例です。開学から半世紀以上経ち、今、東アジアが活躍する中で、かつてのハルビン学院と建國大学で学んだ貴重な体験者も迎え、体験から今後の東アジアのあり方を語っていただく（以上、講演会）とともに、あわせてここにその歴史の経緯を示す展示資料を展示し、その歴史的存在にふれていただくこととしました。また、地元京都と関係が深く東亜同文書院の設立にかかわった荒尾精、根津一、近衛篤磨の3人のキーパーソンの展示も特筆しました。それぞれご覧いただければ幸いです。

入場 無料

展示期間 2010年7月17日（土）～18日（日）
場所 コープ・イン・京都 2階
時間 10:00～18:00

日清貿易研究所の教職員
最前列中央が所長の荒尾精。上海に開所した。1890年頃と思われる。日清貿易研究所の存続は数少なく、当時の教職員を知ることで貴重な1枚である。

論議講義をする根津一院長
根津は院長にありながら科目「論議」を担当。王陽明注釈「古本大学」の講義を行った。1913年、長崎県大村の飯谷合にて。

図録（表紙）

愛知大学東亜同文書院大学 東方斎・荒尾精先生追悼式ご案内

京都・若王子神社より哲学の道が始まるところに、近衛篤磨公撰文による荒尾精先生の顕彰碑があります。荒尾先生は19世紀中葉より始まった西欧列強の中国侵略を阻止し、東亜の保全を図るため、日中の協力団結、特に通商貿易の振興による両国の繁栄を唱導し、これに必要な人材養成のため、盟友根津一と共に上海に日清貿易研究所を設立経営した明治の先覚者であります。

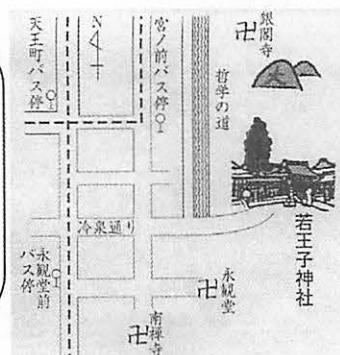
この両者の思想と協力が近衛篤磨を盟主とする東亜同文会の結成と東亜同文書院（大学）の創立を具現したのであるが、荒尾は明治29年、38歳の若さで台北に客死しました。

大志半ばにして斃れた荒尾の死を近衛は痛く惜しみ、荒尾が『対清意見』、『対清辨妄』を著し、アジア経論の卓見を世に問うた、その寓居近くに追悼碑の建立を発起し、その業績をたたえる追慕の碑文を自ら撰したのであります。

霞山会、滬友会、愛知大学同窓会有志一同は、日中提携、東亜保全に尽力した荒尾、近衛、根津三先覚の偉業を偲び、茲にその追悼式を挙行します。奮ってご参加下さい。

日 時 2010年7月18日（日）午前11時～12時30分
場 所 熊野若王子神社 京都市左京区若王子町2
昼 食 若王子神社内（1,500円 当日ご持参下さい）

京都駅より市バス
「永観堂前」または「東天王町」下車 徒歩約5分



ご参加希望の方は7月10日（土）までにお名前、ご連絡先、昼食の要・不要を明記
のうえ下記へFAX・Eメール等でお申し込み頂きますようお願い申し上げます。

参 加 申 込

チェックを入れて下さい↓

お名前 _____（書院・愛大・その他）

昼食	要（1,500円）	
	不要	

ご連絡先 _____

愛知大学東亜同文書院大学記念センター／オープン・リサーチ・センター
〒441-8522 豊橋市町畑町1-1 電話（0532）47-4139 FAX（0532）47-4196
愛知大学豊橋研究支援課 Email tshien@ml.aichi-u.ac.jp

米沢資料展示会・講演会

展示会：8月28日（土）～29日（日）

10：00～18：00

講演会：8月28日（土） 13：30～17：00

本学には、山形県出身の東亜同文書院大学最後の学長であり、本学第2代・4代学長であった本間喜一に関する資料展示室も既に設置され、本間研究がすすめられているため、研究成果発表の場を山形県米沢市に選択しました。

毎回苦勞するのが会場探しです。展示会・講演会を同時に開催でき、交通の便がよく、集客ができ、なおかつ会場費が安いところをインターネットで探しましたが、地元優先の貸出しが多く、県外の人が利用する場合は思うようなところは見つけにくいものです。今回はJR・米沢駅近くで会場が安いのが魅力の、米沢市東部コミュニティセンターを予約できました。

6月には開催のテーマ「米沢が生んだ本間喜一をめぐって—東亜同文書院大学から愛知大学そして最高裁判所—」と3名の講演者が決まり、山形県教育委員会、米沢市教育委員会、川西町教育委員会、（財）霞山会、愛知大学同窓会に後援のお願いをしました。同時にポスター・チラシを作成して広報活動を展開しました。

開催1ヵ月前には、藤田当記念センター長に同行し、会場の下見を兼ねて後援団体を中心に協力をお願いに山形県を訪れました。しかし、13歳で故郷を離れた本間を知る人はなく、集客に不安だったため、その後は草の根広報を展開することになりました。

まず最初に、米沢市教育委員会を訪れ、オープン・リサーチ・センタープロジェクトの展示公開事業を米沢で開催する趣旨について、当記念センターの出版物を持参して十分に説明しました。特に東亜同文書院から愛知大学を引き継いだ本間喜一の人物像について力説しました。同ビル内の米沢市観光協会にもチラシ・ポスターを持参してお願いし、その足で米沢市商工会議所に出向きました。お昼直前、山形新聞に飛び込み支局長に開催の趣旨を伝え事前

の掲載をお願いしました。次に上杉神社に隣接した伝国の杜・米沢市上杉博物館を訪問し、館長や学芸員の方とお会いでき、「地方はやはり人脈や口コミの力が大きい。」との貴重なアドバイスもいただき、成功させたい気持ちが増しました。

午後には、同窓会を代表して樋口校友課長のみならず、上野同窓会東北支部長や武田同窓会山形支部長もわざわざ米沢市東部コミュニティセンターまで来ていただき、いかに人を集めるか等具体的な広報活動について検討をしました。

この日の最後の訪問地である川西町役場の就業時間を気にしながら、米沢発16時9分の米坂線に乗り、羽前小松まで緑豊かな風景をながめ、本間もどんな思いを胸に、この里をあとに上京したであろうと思いをめぐらせながら、のどかな役場まで足を延ばしました。米沢行きの帰りの時刻を気にしながら、短時間でしたが地元への広報と協力をお願いをしました。

19時過ぎには、本間が帰郷の際に訪れていた白布温泉・東屋まで行き、館主の宍戸氏から、本間家や川西町玉庭の歴史について詳しくお話をしていただき、夜が更けるのを忘れるほどでした。

翌日は、館主から紹介された地元新聞の米沢日報を訪れ、米沢での開催趣旨と本間研究について紹介しました。ここに来て初めて、米沢ではなく置賜（おきたま）の地名が本間のふるさとを差すことを教えられ、広報活動時の地名を米沢から置賜に変更しました。次にこの出張の目的のひとつでもある本間喜一の生家・川西町玉庭の小池氏宅に、講演者の山田先生も途中で合流して訪問し、関係資料を確認させていただきました。里山ののどかな田園地帯の集落の中に、築180年の木造茅葺き屋根の曲がり屋がでんと構え、本間喜一の雄姿とダブリ歴史の重みさえ感じました。小池夫妻のお人柄にもふれ、今回の企画をどうしても成功させたいと思いを強くしました。

帰路、新幹線の時刻を気にしながら、一人でも多くの地元の人達に知ってほしい気持ちが増し、



小池家頭首と息子さんにも支援していただき、初日に行けなかった河北新報社、米沢新聞そして文化に理解が深いと評判の遠藤書店にも立ち寄り、時間の許す限り広報活動をしました。特に山形新聞は支局長が対応していただき、会の予告記事もしっかり書いていただきました。

展示会場は、小ホール 59.5m² (8.5m×7m) の空間をどのようにレイアウトするのか、数少ない本間関係史資料を使い、本間を知らない地元の人達に理解しやすい展示について思案しました。パーテーション 17 枚をコの字形に設置し、展示ケース 1 台は山形市内から取り寄せ入り口の壁際に設置しました。

レイアウトは本学の本間展示室を基本にし、ふるさと玉庭での資料、本間が愛用していた帽子や眼鏡等を入れ、一般の人達に関心をもってもらえることを第一に考え、構成することにしました。まず、全体紹介のパネルで本間喜一像を描き、次に 5 枚のパネルを使って川西町玉庭での生い立ちからはじめ、東京帝国大学卒業、東亜同文書院大学最後の学長から愛知大学創立に深く関わったことや、初代最高裁判所の事務総長として活躍したことを中心にしました。

パネルはⅠ. 生い立ち・人間性（教育は愛である）、Ⅱ. 学究時代（法曹界から学問の世界へ）、Ⅲ. 東亜同文書院大学時代、Ⅳ. 最高裁判所事務総長時代（初代三淵長官を支えた二代田中長官へ引き継ぐ）、Ⅴ. 愛知大学時代（厳父そして慈父）、この 5 本の柱を目安に、壁面の幅を計算しながら必要な資料を選択しました。「玉庭歴代村長」、「愛情あふれる本間家の様子」、「最高裁判所事務総長としての本間」、「愛知大学創立時の書簡」の 4 点について A 1 サイズのパネルを使ってわかりやすいようにまとめました。また本学創立一周年記念式典の際、三淵最高裁判所長官が記念講演を行い、その時に書いてもらった掛軸「任重而道遠」（本学が責任重大で前途多難であるという意味）や 1987 年病床にあった本間を見舞い、中日友好協

会の会長を長く務めた孫平化が送った貴重な書「名高北斗寿比南山」（北斗星のように名高い本間先生は南山のように長生きしてください）を当大学史展示室から持参して、本間の人間関係の広さと深さを表現しました。

講演会当日は、原田川西町長や佐藤学長もかけつけていただき、本間を通して新たな交流が生まれました。また、学長から本間先生の胸像目録が川西町長に渡されました。

当日は集客の不安をよそに定員 150 名のところ、総勢 250 名の来場者で席が足りないほどの大盛況となりました。会場駐車場も満車となり、東部コミュニティセンター開設以来の人出とのことでした。ふるさとの人々に広く置賜の偉人として本間喜一を認知していただく大きな一歩となったと思います。

地元の人々は、山田邦明本学文学部教授の「米沢地方の歴史風土と本間喜一」、殿岡晟子氏（本間喜一氏長女）の「私の父本間喜一を語る」や藤田佳久本学文学部教授・当記念センター長の「本間喜一がつかない東亜同文書院大学と愛知大学」の講演を熱心に聴き入ったり、玉庭小学生時代の展示資料を見入っていました。2 日目には、殿岡氏のご好意で手相診断も開催したため、より本間が身近な存在になったと思います。

山形新聞をはじめ米沢日報などの地元新聞や T V 局にも取り上げられたり、マスコミや後援団体のご協力が大成功につながりました。

終了後は各団体に協力のお礼の挨拶まわりをしましたが、こうした無料の文化講演会に市民の期待が大きいこともわかり、歴史ある城下町であることを再認識しました。今回の開催場所は、会場費を安くおさえることで、住宅地の真ん中の東部コミュニティセンターを暑い夏に利用しましたが、場所や時期とは関係なく集客できたことは嬉しい限りでした。

アンケート結果によると、展示については、「簡潔明瞭な展示だった」「こじんまりとしていて見

やすかった」との評価もいただきました。特に玉庭の人は「玉庭小学校卒業証書」から本間をより身近に感じたようです。講演会は、「小学校の皆勤賞をもらうなどの実話がとても面白く興味深かった」「本間の人生・生き方に感動させられた」と偉人としての本間を認識した内容でした。80代の方は「玉庭に嫁に来たころお年寄りから本間の話をよく聞いたが、人格者であると思っていた」と講演に満足していました。本学の卒業生の身内の方は、「弟が卒業生だが、すばらしい方が身近にいたことに驚かされた」、「この企画を継続して

開催してほしい」など多くの感想をいただきました。会場については、「講演場所はフレッシュな感じで大変よかった」と体育館も兼ねたホールについて、不安をよそに好評でした。「住宅地の中で分りにくい」「駐車場が満員だった」とのご意見もいただき、結果的には「米沢市上杉博物館」で開催できたらよかったなどと大成功であったからこその発言もありました。

会場の関係で展示できなかった本間喜一に関する質問や展示の要望もあり、本学に対する興味が深まったことを感じた企画でした。

愛知大学東亜同文書院大学の 米沢資料展示会・講演会

米沢が生んだ本間喜一をめぐって

— 東亜同文書院大学から愛知大学そして最高裁判所 —

1901年上海に開学し、1945年敗戦によって閉学となった東亜同文書院最後の学長であった本間喜一は、日本に引き揚げるすぐ書院を継承するべく、1946年豊橋の地に愛知大学を開設し、学長に就任して愛知大学の発展に尽力しました。その一方、最高裁判所の事務総長も努め、戦中戦後の日本の教育と裁判制度に大きく貢献しました。本間喜一は山形県東置賜郡川西町の出身で、その進取な気性は米沢地方の伝統と文化に育まれたものです。そこで今回、この地方が生んだ本間喜一を広く知っていただくために、本間喜一をめぐって講演会と展示会を当地で開催いたします。この機会に郷土米沢が生んだ本間喜一に少しでもふれていただければ幸いです。



展示会 2010年8月28日(土)～29日(日) 10:00～18:00

場所: 米沢市東部コミュニティセンター

講演会 2010年8月28日(土) 13:30～17:00 定員150名

場所: 米沢市東部コミュニティセンター

入場無料
どなたでも
ご自由にご参加
ください。

①「米沢地方の歴史風土と本間喜一」

山田 邦明氏(愛知大学文学部教授)

②「私の父 本間喜一を語る」 殿岡 景子氏(本間喜一氏 長女)

③「本間喜一がつかない東亜同文書院大学と愛知大学」

藤田 佳久氏(愛知大学文学部教授・愛知大学東亜同文書院大学記念センター長)



主催: 愛知大学東亜同文書院大学記念センター／オープン・リサーチ・センター

後援: 山形県教育委員会、米沢市教育委員会、川西町教育委員会、(財) 霞山会、愛知大学同窓会

お問い合わせ 愛知大学東亜同文書院大学記念センター／オープン・リサーチ・センター
〒441-8522 愛知県豊橋市町畑町1-1 TEL (0532) 47-4139 FAX (0532) 47-4196
愛知大学豊橋研究支援課 E-mail: tshien@ml.aichi-u.ac.jp

愛知大学東亜同文書院大学の米沢資料展示会

「東亜同文書院大学」から「愛知大学」へ



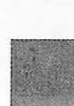
『厚田時香』
厚田時香(1833～1905年)は、ヘボンから許可された日英の販売で利益をあげ、1878年上海に「泰西堂」を開店、日中貿易推進と日中提携論を掲げ、東の販売だけでなく東家業としても活躍した。
洋画家で有名な岸田河津の父。
(出展なし)



『近衛篤磨』
近衛篤磨(1863～1904年)。近衛文麿の父、若くしてヨーロッパに留学し、政治・法律を学ぶ。帰国後は貴族院議員を務めた。日中提携を目指し、アジア重視の活動を行った。1898年、東亜同文書院の初代会長に就き、東亜同文書院創設を指導した。
(出展なし)



『丹心照萬古』
近衛文麿書翰。『丹心 萬古を照らす』。忠義の真心が、つても光り輝くという意味。明末の楊雲龍(臨刑詩二首)の一句。
(出展なし)



『日清貿易研究所』
日清貿易研究所創業記念写真(1893年)。当時の様子を伝えている。数少ない資料。同研究所は、日中の共有事業を志す近衛篤磨(1863～1904年)によって、日中間で活躍する人材の育成を目指し、1890年上海に設立された。
(出展なし)



『近衛篤磨と松江真嶺の秋妙年』
近衛篤磨書翰。『近衛篤磨と松江真嶺の秋妙年』。近衛篤磨の秋を巻く、妙年。近衛篤磨の秋を巻く、妙年。近衛篤磨の秋を巻く、妙年。
(出展なし)



『東亜同文書院入学式写真』
創立会館で撮影された第1期生入学式写真。最前列中央に近衛篤磨東亜同文書院会長、左隣に横澤一東亜同文書院院長の姿がある。1902年4月。
(出展なし)

『書院の指導者たち』



近衛篤磨(1863～1904年)
日清貿易研究所長。

横澤一(1860～1927年)
東亜同文書院初代会長(1901～1902年)。第3代院長(1903～1904年)。

松浦重剛(1855～1924年)
第2代院長(1902～1903年)。

大津繁平(1865～1930年)
第4代院長(1923～1928年)。



近衛文麿(1891～1945年)
第5代院長(1928～1931年)。後に就任。



大内暢三(1874～1944年)
第6代院長(1931～1940年)。初代院長(1940年)。1939年12月、東亜同文書院の大学母体と前に初代院長に就任。



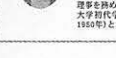
矢野七太郎(1879～1957年)
第7代院長(1940～1943年)。第2代院長(1943～1944年)。



本間喜一(1891～1987年)
第8代院長(1944～1945年)。第3代院長(1945～1946年)。第4代院長(1946～1947年)。

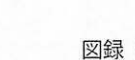
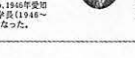
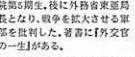
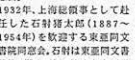
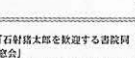
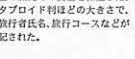
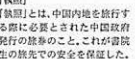
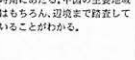
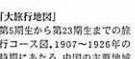
『書院キャンパスの変遷』

東亜同文書院は、戦前によって4度の移転を余儀なくされている。
①桂葉園(クイシェリ)校舎
②桂葉園(クイシェリ)校舎
③桂葉園(クイシェリ)校舎
④桂葉園(クイシェリ)校舎
⑤桂葉園(クイシェリ)校舎



『大旅行地区』

第1期生から第23期生までの旅行コース図。1907～1926年の期間にある。中国の主要地域はもちろん、近畿まで調査していることがわかる。



175

名古屋資料展示会・講演会

展示会：11月27日（土）～29日（月）

10：00～18：00

講演会：11月28日（日） 13：30～16：30

展示公開プロジェクトの最後の開催場所は、当初愛知大学車道校舎を予定していましたが、本学同窓生が松坂屋に多く就職しており、会場費を同窓会から負担していただけることで、マツザカヤホールを開催場所に決めました。

このプロジェクトの最後の基調講演は、『われ巣鴨に出頭せず』を著されたノンフィクション作家・工藤美代子氏の「近衛文麿公の『われ巣鴨に出頭せず』をめぐって」と藤田佳久本学文学部教授・当記念センター長による東亜同文書院大学の歩みと、5年間のプロジェクトの展開についても紹介することにしました。

工藤氏は近衛文麿公の行動を論理的に検証し、東京裁判を根底から覆すほどの功績があったとして、東亜同文書院記念基金会から記念賞を受賞された方です。

2010年6月、名古屋市栄にある松坂屋名古屋店に会場下見を兼ねて、打ち合わせに出かけました。思っていた以上に会場使用の規制が多いデパートでの講演会・展示会をどのように構成するのか、不安を感じながら会場のイメージ作りをしました。

テーマに合わせてどのような魅力ある企画をすればどれだけの集客が可能なのか、大学が所蔵する限られた史資料の中で何に興味を抱いてもらえるかなどについて、今回も検討を重ねました。

後援団体は、愛知県教育委員会、名古屋市教育委員会、朝日新聞社、中日新聞社、毎日新聞社、読売新聞社、日本経済新聞社名古屋支社、(財)霞山会。共催は、展示公開プロジェクト事業を最初から支えた本学同窓会の計9団体へお願いをしました。

夏休み前には、薄謝でご無理に講演の依頼をしていました工藤美代子氏から快諾のメールをいた

だき、喜びながら早速ポスター・チラシを作成して情宣活動を始めました。

米沢展示会・講演会が終わると息つく暇もなく、具体的に展示をどのように公開するか、テーマや講演内容を視点に入れ、過去の展示内容を分析しながら具体化していきました。

会場のレイアウトは、マツザカヤホールを大きく2つに分けることにしました。展示史資料は、パーテーションの寸法や会場個々の展示品を活かせる方法を試行錯誤しながら選択し、本学が所蔵する主な展示物は、写真を撮り解説を加えて展示図録を作成して理解を深めていただくようにしました。

最初のコーナーは、「近衛家、荒尾精と「東亜同文書院」の誕生」とし、特に近衛家4代の貴重な書、近衛忠熙（掛軸）、近衛篤磨（掛軸）、近衛文麿（掛軸）、近衛文隆（掛軸）を中心に配置し、新たに文麿、文隆の説明パネルを作成しました。荒尾精の紹介については、京都展示会場で寄贈いただいた見栄えのする「荒尾精書幅」（縦215cm×横95cm）をコーナーの中心に設置し、新たに「荒尾精家の紹介」、「荒尾の姪の紹介」をA1サイズのパネルで作成し、計17点を展示しました。

次のコーナーは「孫文を支えた書院の山田良政・純三郎兄弟」とし、会場入り口正面には「山田良政先生墓碑」（掛軸）と東亜同文書院評議員であった故櫻木俊一氏（名古屋出身）に贈られた孫文の書「天下為公」（額縁）をメインに設置し、また入り口付近のコーナーは、「履忠蹈信」（額縁）と「恕無怨」（額縁）をポイントに孫文関係史資料を展示しました。ガラスケース内には、「土屋文明短歌」と「孫文訃報電報」を入れて計21点を展示しました。

第2室は、「東亜同文書院から愛知大学へ」をテーマに、4つのコーナーを設けました。特に「書院の指導者たち」や「大旅行」をポイントに4点、日中関係は中華民国第3代・第6代大統領の黎元洪から東亜同文書院創立20周年を記念し

て贈られた書「一道同風」を入れ6点、最後の愛知大学コーナーは2つのケースも設置し、計28点の資料やパネルを選びました。

第2室から出口までの長い通路には、創成期の群像を中心としたイーゼルパネル34脚を使用して、展示することにしました。

11月には、会場の最終確認のため再度訪問して松坂屋の実施担当者、パーテーション設置業者の三者で予め作成した100分の1の図面を基に講演会場のレイアウトや展示会場のパーテーションの位置などを具体的に決めました。現場に立ち、この広いイベント会場で一般の人をどのくらい呼び込むことができるのか、集客に不安を感じながらの打合せでした。

事前に担当業者からマツザカヤホールの平面図を受取り、パネルの寸法の大きさ、展示ケースのサイズなどの備品を確認した上で、こちらで検討した内容を図面化して打合せに臨んだことで、会場レイアウト案が順調に決まりました。

この展示公開プロジェクト事業も9回目となり、毎回試行錯誤しながら実行してきたことが生かされたことを実感しました。

展示物は、参加者メンバーで一つひとつ梱包し、4個の大型Boxに納めてチャーター便に乗せ、搬入から飾り付け、搬出までを皆で協力しておこなっていました。

受付には、名古屋展示会図録をはじめ当記念センター案内やオープン・リサーチ・センター成果物の展示・販売コーナーも設けることにしました。

展示会場の準備は、開催日の前日の午後に出張者全員で行いました。会場レイアウト案通、会場を大きく2つに分割。講演会場は椅子200席を並べ、演台、司会台を設置しました。プロジェクターは同窓会副会長の加藤氏のご好意により借用しました。

展示品等を乗せたボックスチャーター便が届くと同時にレイアウトに従い、展示物を設置しまし

た。展示会場にはパーテーション65枚、ガラスケース5台設置。写真パネルや掛軸を取り付けると、ゆったりとした見栄えのする展示室に生まれ変わりました。なお、出口には本間先生の胸像の素像が置かれました。

28日の講演会は、工藤氏のわかりやすい近衛文麿公解釈に加えて当記念センター長の「東亜同文書院大学から愛知大学へオープン・リサーチ・センタープログラム事業にも関連してー」の講演もあり、展示内容をより理解することができたと思います。

中日新聞や読売新聞に掲載されたことも大きく影響し、集客の不安をよそに3日間で述べ500名の来場者があり、東亜同文書院から愛知大学の流れが話題になりました。名古屋市在住の方から東海4県、石川、福井、大阪、神奈川、埼玉、東京、千葉県と遠方からもお越しいただき、改めてこのプロジェクト事業の大きさや役割を肌で感じ、開催の目的を果たすことができました。

アンケート結果では、「展示のコンテンツがしっかりしていて見やすかった」、「展示会場に寮歌が流れていて静かにゆっくりと拝見できた」と展示についてお褒めのこともありました。新聞を見て来場した方からは、「講演場所が大学では敷居が高いが、デパートが会場なら来やすい」、「講演中には展示会場を閉めてほしかった」との会場のご意見もいただきました。展示については、東亜同文書院卒業生のご家族からは、「父や叔父が過ごした書院を理解でき感激した」と企画の喜びの声が届きました。本学の卒業生は、「あらためて母校を知る機会となった」、「この企画を継続して開催してほしい」など多くの感想をいただきました。在学生からは、「大学の授業ではここまで詳しい内容は見聞きできないのですごくよかった」、「書院から愛知大学の設立が理解できた」、「ここに来て偉大な歴史ある愛知大学生であることに誇りに思えた」などと記載され、印象に残った資料としては「大旅行」や敗戦後に中国政府から山田

純三郎に送られた「国民政府軍発行通行許可書」をあげて、孫文の秘書をつとめた山田純三郎がどれほどの存在であったかの証だと評価していました。会場の関係で展示できなかった本間に関する質問や展示の要望もあり、本学に対する興味が深まったことを肌で感じました。

今回も厳しい予算の折、企画から実行まで出

る事は全て手づくりで行うことを目標に展示会・講演会を実施しましたが、共催・後援団体のご協力や中日新聞や読売新聞に記事として掲載されたことも、大きく集客にプラスになりました。

今回もプロジェクトメンバー全員が汗を流しただけの成果を実感した展示会でした。



愛知大学東亜同文書院大学記念センター資料の 名古屋展示会・講演会

「東亜同文書院から愛知大学へ
— 近衛家、荒尾精、孫文、中国アジア大旅行、日中交流 —」

愛知大学東亜同文書院大学記念センターは、2006年に文部科学省の学術高度化推進事業であるオープン・リサーチ・センタープロジェクトに採択され、5年間にわたり愛知大学の前身校であり、1901年上海に設立された東亜同文書院大学の研究とその歴史的存在意義を見出してまいりました。

このプロジェクトのうち、収蔵資料の公開事業は「東亜同文書院大学から愛知大学へ」をメインテーマとし、これまで横浜からスタートし、東京、福岡、弘前、神戸、シカゴ、京都、米沢など国内外で展開して記念展示会と講演会を行い、その最後を以下の要領で地元名古屋で開催することになりました。

この記念すべき会の基調講演には東亜同文書院の院長を務めたあと、戦時中に総理大臣に就任した近衛文麿公について『われ果鴨に出頭せず』を著され、東亜同文書院記念基金会賞を受賞された工藤美代子氏をお迎えしました。あわせて、当記念センター長による東亜同文書院大学の歩みと、当プロジェクトの展開についてもご紹介いたします。ぜひご関心のある多くの方々にご参加いただければ幸いです。

展示会 2010年11月27日(土)～29日(月)
時 間 10:00～18:00

講演会 2010年11月28日(日)
時 間 13:30～16:30

場 所 松坂屋名古屋店南館 8階 マツザカヤホール



近衛文麿

講演 1

工藤美代子氏
●作家
「近衛文麿公の『われ果鴨に出頭せず』をめぐって」



講演 2

藤田 佳久氏
●東亜同文書院大学記念センター長 愛知大学文学部教授
「東亜同文書院大学から愛知大学へ—オープン・リサーチ・センタープログラム事業にも関連して—」





入場無料 どなたでもご自由にご参加ください。

■主催／愛知大学東亜同文書院大学記念センター／オープン・リサーチ・センター
 ■共催／愛知大学同窓会
 ■後援／愛知県教育委員会・名古屋市教育委員会・朝日新聞社・中日新聞社・毎日新聞社・読売新聞社・日本経済新聞社名古屋支社・(財)霞山会

お問い合わせ 愛知大学東亜同文書院大学記念センター
 〒441-8522 愛知県豊橋市町畑町1-1 TEL. (0532) 47-4139 FAX. (0532) 47-4196 E-mail: tshien@mlaichi-u.ac.jp

愛知大学東亜同文書院大学の名古屋展示会

近衛家、荒尾精と「東亜同文書院」の誕生

【近衛篤磨】
近衛篤磨(1863~1904年)、近衛篤磨の父、若くしてヨーロッパに留学し、政治・法律を学ぶ。帰国後は貴族院議員を務めた。日中提携を目指すと、アジア直轄の活動を行った。1898年、東亜同文書の創設会長に就き、東亜同文書院創設を指導した。

【清徳天皇と松江萬頃・秋山年経】
清徳天皇(1879~1912年)は、近衛篤磨の父、若くしてヨーロッパに留学し、政治・法律を学ぶ。帰国後は貴族院議員を務めた。日中提携を目指すと、アジア直轄の活動を行った。1898年、東亜同文書の創設会長に就き、東亜同文書院創設を指導した。

【松花江勸業】
近衛篤磨(1863~1904年)、近衛篤磨の父、若くしてヨーロッパに留学し、政治・法律を学ぶ。帰国後は貴族院議員を務めた。日中提携を目指すと、アジア直轄の活動を行った。1898年、東亜同文書の創設会長に就き、東亜同文書院創設を指導した。

【日清貿易研究所】
日清貿易研究所(1893年)、当時の様子。伝る数少ない資料。同研究所は、日中の共存共栄を志す荒尾精によって、日中間で活躍する人材の育成を目指し、1890年上海に設立された。

【荒尾精書翰】
荒尾精が日清貿易研究所を設立する頃にしたためた書。

【西中露】
近衛篤磨書翰。「春のにちち出て見れはくひすのこよ外は春なけり」
忠徳(1863~1898年)は、近衛篤磨の父、若くしてヨーロッパに留学し、政治・法律を学ぶ。帰国後は貴族院議員を務めた。日中提携を目指すと、アジア直轄の活動を行った。1898年、東亜同文書の創設会長に就き、東亜同文書院創設を指導した。

【丹心照萬古】
近衛篤磨書翰。「丹心 萬古を照らす」。忠徳の真意がいつまでも光り輝くという意味。明末の楊繼盛(臨刑詩二首)の一句。

【荒尾精】
荒尾精(1869~1896年)は、丹心書から伝された「東亜同文書院の創立者」を説く。中国語を学ぶ。日清貿易研究所は、日中の共存共栄を志す荒尾精によって、日中間で活躍する人材の育成を目指し、1890年上海に設立された。

【人乃本心は書にして】
荒尾精書、書の末に「東方者」は荒尾の号。

【石録】
荒尾精が1895年に牧野虎次(1871~1964年)へ贈った書。牧野は同志社創立者・新島襄の直弟子で、1941年から1947年まで同志社総長を務めた。

孫文を支えた書院の山田良政・純三兄弟

【山田良政写真】
山田良政は、1900年に孫文が中国東省惠州で起こした「惠州起義」に参加して戦死した。中国革命に参加して命を落とした最初の日本人といわれている。

【山田良政先生墓所】
1913年2月27日、日本を公式訪問していた孫文が訪れたもの。東京京谷中の全生庵に建立された孫文の墓となつている。ただし、その碑は「山田良政先生墓所」ではなく「山田良政君墓所」(大東義塾学と記載されているなど、異なっている部分がある。

【天下為公】
孫文書。「天下を公と為す」。天下を私せず公物とするという意味。『礼記』『礼運篇』の一句。孫文はこの言葉を好んで書いた。山田兄弟のものとにも掛けられているが、展示品は東亜同文書院評議員であった故郷木下氏(名古屋出身)に贈られたもの。

【履忠蹈信】
貴族書。「忠を履き、信を蹈む」。貴族(1874~1916年)は東京で孫文による中国同盟会立ち上げに参加。軍事面で孫文を支え、辛亥革命直後には南京臨時政府陸軍総長を務めた。

【孫文と山田純三】
右側が孫文。左側が山田純三。純三は山田良政の弟。良政の死後、その遺志を受け継ぎ、孫文の秘書として革命活動を支えた。1925年に孫文の臨終に立ち会った唯一の日本人である。

【孫文と宋教仁】
1920年に上海で撮影され、山田純三が宋教仁に贈った写真。孫文夫人の宋教仁(1893~1913年)は孔祥熙(国民政府幹部)婦人の姉・宋教仁、蒋介石夫人の姉・宋教仁とくは「宋家三姉妹」として知られている。

【孫文の革命資金に関する書類】
孫文が山田純三に宛てた簡収書。1915(民国4)年2月2日の日付がみえる。革命資金として渡された金の簡収書と思われる。

【暗号電報】
山田純三と孫文をはじめとする広東政府首脳間の暗号電報。

【後援新平の孫文への見舞状】
1925年2月28日、後援新平は台湾総督府民政長官を務めた時(1898~1906年)以来、孫文を支援していた。また、1906年に山田純三が義勇隊に就任したのは、当時義勇隊であった後援によって採用されたという説があった。

【孫文訃報電報】
1925年3月13日、国民政府委員・孫科(孫文長男)から東京の山田純三に宛てられた、孫文の死去を伝える電報。

【孫文移靈祭】
1925年、北京で客死した孫文は、北京西山の碧雲寺に埋葬されたが、1929年6月2日、南京に新しく建てられた中山陵に改葬された。

【土曜文明壇】
1944年、土曜文明(1890~1990年)が、南京の中山陵を訪れた際、山田良政の碑をみて詩んだ短歌。『土曜文明壇』所収「純南京短歌」中の一句。展示品は、山田純三(山田純三郎四男)に贈られたもの。

【慰問書】
大東義塾。「慰問書」。慰問書。孫文の長男・孫科(孫文長男)から東京の山田純三に贈った書。1929年夏、南京の最前線(1891~1949年)の慰問で贈られた書。孫文移靈祭に参列した際のものとと思われる。

【国民政府軍光復進行証】
日本敗戦後、中国国民政府は山田純三と孫文の協力者として厚遇し、花束贈りなどの生活を保続した。山田の帰国に際し、中国国民政府は一般の日本人引揚者の場合と異なり荷物制限を課さなかったが、彼は孫文に関わる多くの資料を残して帰国したといわれている。

図録 (1 頁)

図録 (2 頁)

図録 (3 頁)

愛知大学東亜同文書院大学の名古屋展示会

「東亜同文書院大学」から「愛知大学」へ

「書院の指導者たち」

近衛精 (1859～1906年)
自達貿易研究所所長。

組津一 (1860～1927年)
東亜同文書院初代院長 (1901～1902年)、第2代院長 (1903～1923年)。

杉浦直樹 (1855～1924年)
第2代院長 (1902～1903年)、第4代院長 (1923～1926年)。

大津謙平 (1865～1929年)
第4代院長 (1923～1926年)。

近衛文雄 (1891～1945年)
第5代院長 (1926～1931年)、第6代院長 (1932～1933年)。

大内梅三 (1874～1944年)
第6代院長 (1933～1940年)、第7代院長 (1940～1942年)、第8代院長 (1942～1943年)。

矢田七太郎 (1879～1957年)
第7代院長 (1940～1942年)、第8代院長 (1942～1943年)。

本間喜一 (1891～1987年)
第8代院長 (1943～1944年)、第9代院長 (1944～1945年)。

「組津一」
組津一 (1860～1927年)は、近衛精の同志として「自達貿易研究所」の運営に尽力した。後に近衛文雄の経歴に応じ、東亜同文書院開設に協力し、院長として書院の礎を築いた。

「書院キャンパスの変遷」
東亜同文書院は、戦前によって3度の移転を繰り返している。
① 経世館 (イシュ) 校舎
② 経世館 (イシュ) 校舎
③ 経世館 (イシュ) 校舎
④ 経世館 (イシュ) 校舎

「大津謙平の経歴」
大津謙平の経歴は、1926年、中国の雲南、ミャンマー方面へ調査旅行を行ったものである。

図録 (4頁)

「東亜同文書院大学」から「愛知大学」へ

「機関」
「機関」とは、中国内地を旅行する際に必要とされた中国語教育の旅行の旅行のこと。これが書院生の旅行での安全を保障した。タブロイド判ほどの大きさで、旅行者氏名、旅行コースなどが記された。

「華語辞典」
「華語辞典」は、東亜同文書院内で編纂された日本初の本格的な中国語教科書である。大旅行時の実用を念頭に、多岐にわたる内容であった。好評を得て、再版を重ねた。

「石村賢太郎を歓迎する書院同窓会」
1932年、上海に旅行して赴任した石村賢太郎 (1887～1954年) を歓迎する東亜同文書院同窓会、石村は東亜同文書院第5期生、後に外務省東亞局長となり、戦争を拡大させる軍部を批判した。著書に「外交官の一生」がある。

「東亜同文書院大学 在日同窓会写真」
1951年11月28日に台湾・台北で開催された東亜同文書院大学同窓会の写真。台湾出身、日本人合計40名が一堂に集った。大賞賛を受けた。台湾・蘭陽 (第35期生) 氏提供。

「学務簿」
愛知大学保存。1946年、上海から日本へ引き揚げる旧東亜同文書院大学教員と学生は、「学務簿」と「成績簿」を手分けして持ち帰った。外地にあった日本の学校で、「学務簿」「成績簿」を完全に持ち帰ったところはほかにないといわれている。

「愛知大学の指導者たち」

林義雄 (1872～1950年)
元愛知大学校長。日本における外交史研究の権威者である。東亜同文書院議員、ワシントン公使館員 (1914年) など政治外交でも活躍した。1936年より東亜同文書院を退任。1946年愛知大学初代校長 (1946～1950年) となった。

本間喜一 (1891～1987年)
東京府立大学教授、弁護士を経て1949年東亜同文書院に赴任。東亜同文書院大学最後の学務長を務め、戦後は愛知大学第2代・第4代校長 (1945～1955年、1959～1963年)。

小宮井芳 (1897～1959年)
東京府立大学卒業後、大蔵省通関士を経て東亜同文書院大学教授となる。戦後は愛知大学第3代校長を務めた (1955～1959年)。

主催：愛知大学東亜同文書院大学記念センター／オープン・リサーチ・センター
共催：愛知大学同窓会
後援：愛知県教育委員会／名古屋市教育委員会／朝日新聞社／中日新聞社／毎日新聞社／読売新聞社／日本経済新聞社名古屋支社／(財) 霞山会

図録 (5頁)

愛知大学東亜同文書院大学記念センター資料の名古屋展示会・講演会

「東亜同文書院から愛知大学へ
—近衛家、荒尾精、孫文、中国アジア大旅行、日中交流—」

愛知大学東亜同文書院大学記念センターは、2006年に文部科学省の学術高度化推進事業であるオープン・リサーチ・センタープロジェクトに採択され、5年間にわたり愛知大学の前身校であり、1901年、上海に設立された東亜同文書院大学の研究とその歴史的意義を見出してまいりました。
今回の最終年度にあたり、地元の皆様にも東亜同文書院から愛知大学への展開に関する歴史的資料を展示させていただきます。近代日中間関係の側面でもある実際の姿を垣間見ていただければ幸いです。
なお、講演会 (11月28日、13時30分から) もそれをご理解いただけるよう企画いたしました。あわせてご参加いただければ幸いです。

展示会 2010年11月27日(土)～29日(月)
時間 10:00～18:00

講演会 2010年11月28日(日)
時間 13:30～16:30

入場 無料

場所 松坂屋名古屋店南館8階 マンザカヤホール

近衛文雄

愛知大学記念館(左)と、館内に展示されている東亜同文書院大学の学務簿と成績簿(右)
東亜同文書院大学の命脈といえるものであり、戦後愛知大学に継承された。

お問い合わせ
愛知大学東亜同文書院大学記念センター
〒441-8582 愛知市市川町1-1 TEL (0532) 47-4139 FAX (0532) 47-4195 E-mail tshien@ml.aichi-u.ac.jp

図録 (表紙)